

基調講演

「オリンピック・パラリンピックと都市」

講師 青山 侑 氏

明治大学公共政策大学院 教授

どうも皆さん、こんにちは。青山でございます。どうぞよろしくお願いいたします。今日はニッセイ基礎研究所の講演でお話をさせていただくということで、大変光栄でございます。この後、専門家の皆さまとパネルディスカッションが予定されておりますので、私はその前座のつもりで、このテーマについてやや勝手なお話を申し上げたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。私に頂いたテーマは「オリンピック・パラリンピックと都市」というテーマです。

ご紹介いただいたように、私は長く都庁に勤務いたしました。36年勤務した中で、随分前のことですが、今話題の中央卸売市場の施設整備係長といった仕事もしたことがあります。その頃は築地市場の皆さんに「大田市場に移転してください」とお願いしていたのですが断られまして、神田の市場だけが大田市場に移りました。神田市場は現在、秋葉原のビルが建っている所がありました。その後十数年、鈴木都政時代に築地の再整備を試みたのですがうまくいかなくて豊洲移転になりました。

今日はその話はしませんが、都市計画では常に賛否両論あります。鈴木俊一さんが都知事のときでしたが、大江戸線を造ったときは、環状線部分で28kmあり、今どきこんな長大な地下鉄を造るのかと、随分批判を受けた覚えがあります。

その後、石原慎太郎さんが知事になってから大江戸線は完成したわけですが、大江戸線は2000年のオープン時点で1兆円の債務を抱えておりましたが、今は3000億円台に減少しております。大変多くのお客さまにお使いいただいたからだと思います。

山手トンネルについては、石原さんが知事になられた1999年、最初の予算査定で、山手トンネルを掘りたいという予算の説明を私たちが知事にいたしました。そしたら石原さんから、「俺が生きている間にできないものに、俺は予算は付けないぞ」と言われました。誠に石原さんらしい率直なお話だったと思います。私どもは、「いえ、山手トンネルは石原さんが生きている間に造ります」と言いました。「調子のいいことばかり言いやがって」と言われましたけれども、予算は認めていただきました。

山手トンネルは2015年に完成いたしました。16年かかったわけです。石原さんはまだお元気です。ですから、私どもは約束を守ったということになると思うのです。ある意味、石原さんは選挙で1票にもならない山手トンネルに、知事をお務めになった13年半の間、一貫して予算を付け続けていただきました。

自分の代には完成しないけれども、次の世代が活用して事業活動を営めるものいかに取り組めるかが、知事の真価の一つだと私は思いますので、現在の小池百合子知事にもそういったことを期待しているわけです。今日はそういった視点からの当事者のお話というふうに受け取っていただくとありがたいで

す。

(以下、スライド併用)

1——オリンピックのレガシー

早速、本論に入りたいと思います。オリンピックをめぐるっては、ここに書いてあるような白紙撤回など、あまり前向きでない話題がいろいろありました。もちろん当面は、特に経費の掛かる都立3施設の見直しが焦点になっているわけですが、これらの見直しは1カ月以内に終わると小池知事が発言しておりますので、これからはなるべく、スポーツや文化や夢、都市など、まさにこれからの経済をけん引していくテーマについての話題が盛んになることを期待しているところです。

オリンピックのレガシーが話題になり始めたのは、大体2004年のアテネ五輪の頃からです。それまでは、オリンピックを招致する都市にとって求められる理念はサステナビリティであったわけですが、アテネの施設が必ずしもその後使われてないこともありまして、そういったところから、サステナビリティと並んでレガシーも、オリンピック招致の理念の1~2ページ目に書くのが普通になりました。

この場合のレガシーというのは、もちろん競技施設がその後、市民にどう使われてきたかが中心となりますが、関連施設、インフラ、それから特に注目すべきは、オリンピックを行ったことによってその都市あるいは国の社会がどう変化したかということも議論される傾向に今日はあるということです。そういう意味では1964年の東京五輪は、駒沢のオリンピック競技場が今日でもまだ50年以上を経て市民がスポーツに親しむ場になっている点で、競技施設の面では一つのオリンピックのモデルということで、議論の対象となっているわけです。

同時に、駒沢のオリンピック公園の競技場で、1964年に日本の女子バレーボールチームが当時のソ連を相手に大活躍しました。その後、日本中でママさんバレーがブームになりました。それまでの日本の長い歴史の中でも、女性が仕事のために家事を誰かに託して出掛けるのは普通のことでしたが、ママさんバレーをきっかけに女性が自分たちの楽しみのために家事を誰かに任せて外出するのが当たり前になりました。数年前に亡くなってしまいましたが、そのときのキャプテンだった河西昌枝選手は、私との雑誌の座談会でそのことを語っていて、大変誇りにしているとおっしゃっていたのが印象的でした。

この種のことは、国際的に私たちが外国人とオリンピックの議論をするときに、説得力のある話になります。レガシーというのはそういう非常に広いものだとお受け取りいただきたいと思います。特に、レガシーについて、2012年に開催したロンドン五輪ではかなり早い時期から取り組み、ここに書いてあるのは開催5年前にイギリスの文化・メディア・スポーツ省が出した「レガシーの約束」ですけれども、そういったものを作ってまいりました。

東京の場合は今、東京都と、IOCと、東京都の管理団体でやるべきだといった議論をしておりますが、東京都が組織としての実態があるものですから、そういった議論になるわけです。ロンドンの場合は、サッチャー政権の時代にロンドン市役所を廃止しまして、その後労働党が政権を取ったときに回復したけれども、職員数約500人のいわゆる政策官庁であって、そういう巨大な組織ではないことから、文化・メディア・スポーツ省がスタート時点からかなりいろいろなことを負ったことがあって、こういうレガシーの約束をいた

しました。

結果、どうなったか。これが現在のオリンピック記念公園です。彼らは「エリザベス記念公園」と言っております。つい最近の写真ですけれども、とてもきれいに整備されております。ただ残念ながら、人影はあまりなく、この写真に写っているのは私です。私たちが行っても自由に遊べるということで、彼らはこれが最大のレガシーだと言っているのですが、人々が親しむまでにはまだ至っていないという現状だと思います。

これがオリンピック会場に至るストラットフォード駅の開催前の様子でございます。ロンドンで地下鉄に乗りますと、東側に行くとこのストラットフォードで地上に出て終わり、ここから郊外電車やバスに乗り換えます。乗換駅になるのですけれども、こんな感じでした。

それが今日ではこんな感じになりまして、確かにストラットフォード駅はとても良くなったと思います。

それから、ここがメインスタジアムができた場所で、オリンピック開催前はこんな感じでした。地図で調べて、ナビを使っても、どこがメインスタジアムの予定地かなかなか分からない状況でした。川も汚れておりました。草むらは自然の草むらではなくて、産業革命後の汚染された土壌でございましたけれども、これらも浄化して川もこのようにきれいにしたというのは、一つのレガシーということになろうかと思えます。

ザハ・ハディドが設計した水泳競技場は、このように仮設のスタンドが張り出しておりましたが、現在はこのような仮設を取っ払いまして、ザハ・ハディドらしい非常に流線型のいいデザインのプールができて、わずかな人数ですけれども市民がお金を払って泳いでいる姿を私たちは見る事ができました。

この向こうにできたオービットタワーも、オリンピックのシンボルタワーとして残ったわけですが、これまた人影が少なく、高いお金を取られますけれども、ここに上ると辺りの景色は非常によく見え、すいているからとても快適といえると思います。

それよりも何よりも、私はロンドンの人に、最大のレガシーはこれだったのではないかと言うのですが、ストラットフォード駅に降りると、デッキを通过这个のウエストフィールドショッピングセンターというモールに行きます。約300店舗が入っていて、オーストラリア資本です。従来はロンドンの西側にしかなかったのですが、ストラットフォード駅に隣接してウエストフィールドショッピングセンターを通り抜けると、オリンピック会場に行くというあしらいになっています。その結果、ここで数千人の雇用が生じたということがあります。

ここで買い物をしている人たちを見ても、ロンドンに多く住む移民の人たちはこの頃は3割近くになっていたと思いますけれども、自分の代に移民してきた人たちに雇用と買い物を楽しむ場ができたことは、大変なレガシーだったのではないかと思います。

オリンピックのやり方というのは、いろいろあります。例えば2008年の北京五輪の閉会式です。これは私が撮った写真ですが、ここで当時のロンドン市長であるボリス・ジョンソンさんが北京市長から例の大きなオリンピックの旗をもらいました。次の2012年の開催地はロンドンということになります。

私はその後、ロンドン市役所に行くたびに「あの大きい旗はどこにあるの?」と聞いたのですが、ロンドン市役所の人「誰も知らない」と言っていました。ある日、私は自分で見つけたのですが、ロンドン市役所の地下の職員食堂の横にある物置に、こうやって置いてありました。

こちら辺は旗の扱いが誠に違うと思いますが、それぞれ国民性で、「あんなところにこんなふうにして置いておいていいの?」と私がロンドン市役所に対して言うと、その人たちは「実際の本番のときにはアイロン

をかけてきれいにし出すから大丈夫」と言っていました。

私たちはこれをもたらしてきたのではなく、これがリオに行き、リオから小池知事がもってきたことになりすけれど、誠にこの種の考え方は違うのだと思います。

私は、ロンドンの第2のレガシーはこれではないかと思っています。エミレーツ・エア・ラインはテムズ川を渡るロープウエーで、オリンピック会場を結ぶために造りました。誠に簡易、簡素で便利な乗り物で、オリンピックが終わってもエミレーツ航空とロンドン市役所が協力して運行しております。

2——2040年代の東京の都市像

こういうときに東京でオリンピックが決まったわけで、東京五輪が2020年ですので、今から30年後ぐらいということで「2040年代の東京の都市像」というものを3年かけて、私たち都市計画審議会の中に小委員会をつくって検討してまいりました。最終答申を9月2日に小池知事に対して出しております。東京都がこの答申を受けて、これから行政計画を作ることになっておりますが、この最終答申とその直前に東京都が出した「東京都市白書」がリンクしております。その紹介をしてみたいと思います。

まず東京都の正式な都市構造論というのは、この図になります。つまり東京都という行政区域に限らず関東平野全体、一言で言うと直径約100kmの圏央道を中心とした範囲で都市構造を考えるということです。これは実際に私たちが答申に書き込んだ図面そのものであります。

これを地図で見ると、こうなります。関東平野の一番外側にあるのが直径約100kmの圏央道で、中側が外環道、一番内側が首都高中央環状線ということになります。先ほど首都高中央環状線の山手トンネルの話を申し上げましたが、山手トンネルが2015年に完成して、首都高中央環状線は完成いたしました。埼玉外環はとっくにできているのですが、東京外環が凍結されていて石原都政時代に着工いたしました。これはトンネルですので、やはり確実にできていくことになります。

それから圏央道ですけれども、これは400km近くあるのでなかなかできないと言われていたのですが、2015年時点で80%が出来上がっております。ですから、東京大都市圏としてはこれで確立したということになるかと思っています。

結果、ニューヨーク、東京、ロンドンの3都市それぞれの政府が言っている大都市圏でのGDPを比較しますと、東京大都市圏は圧倒的にニューヨーク、ロンドンに比べてGDPが大きいということになります。GDPの「D」をここで「R」で表わしているのは、Regionという意味で表わしているだけなので無視していただいているのですが、米ドル単位で比較してこれだけの規模に東京大都市圏はなるということであり、これはやはり都市構造のなせる業だと私どもは考えています。

では、東京の中身はどうかといいますと、後でこの点について申し上げますが、非常に都心域が広がってきているといえます。今回の東京都の都市計画審議会の最終答申では、おおむね環7の内側ぐらいに東京の都心域が広がってきているという都市構造で物事を考えようと提言しております。

具体的に言いますと、東京の都市構造は太田道灌以来、一点集中型でずっと来たわけですが、それを1980年代の鈴木都政のときに、副都心をつくる分散型都市構造を決めました。といっても、鈴木都政時代はどちらかというと臨海副都心と新宿副都心がかわいい時代で、都心は副都心を育てるために機

能更新を抑えるという政策を取ってきました。

これだとロンドン、ニューヨークに負けるということで、1995年に環状メガロポリス構造に置き換え、都は事実上、副都心政策をやめました。結果どうなったかということ、都心の機能更新が始まり、2002年に新しい丸ビル、2003年に六本木ヒルズができました。同時に、都市再生法が成立しまして、都心の機能更新が進み、今は国際戦略特区とリンクして行われていくというふうに、政策はかなり変わってきたといえると思います。

なお、東京都は2014年末に出した長期ビジョンの中で、これを部分修正しまして、先ほどの圏央道を中心とした環状メガロポリス構造に、集約型地域構造という言葉を加えました。これを英語ではDiverse Urban Communities within the Ring-Forming Megalopolisといい、環状メガロポリス構造を基本として、その中に多様な都市群があるという考え方に変わってきているわけです。

多様性というのは、都心も同様です。東京の都心とは何を指すのかといっても、その議論の目的によって変わってきていいわけですが、確立している都市軸としては、大丸有、大手町、丸ノ内、有楽町から八重洲、日本橋、常盤橋という軸が一つあると思います。

もう一つは赤坂、六本木から虎ノ門、新橋を通して、出来上がった汐留を通して、汐留は浜松町まで行っていますので、今回は浜松町の貿易センタービルの建て替えや竹芝の都有地の再開発という巨大なプロジェクトがあります。そこまでが連坦(れんたん)することになります。

それから、新宿は副都心として確立してきていることが、この都市白書に出した数字から読み取れるようになっております。

その場合に、これは全ての床面積を足したものですけれども、大丸有・八重洲・日本橋の軸を都心として、赤坂・竹芝軸は六本木、虎ノ門、浜松町を通る軸なのですが、実はもう一つ、築地臨海軸があります。築地から臨海に至る地域というのはこれから環2と首都高ができるのですが、晴海通りができただけでも築地から例えばビックサイトまで車で10分程度、早ければ5分で行ってしまうという至近距離になりました。この一帯の床面積が近年非常に増えております。赤坂・竹芝の床面積を超えるぐらいの床面積が集積しています。なお新宿は、副都心といえるだけの床面積があります。

最近では、例えば大手町にOOTEMORIができたり、日本橋川沿いに遊歩道ができたりして、かなりこの辺も変わってきています。

これに対して、さらに今年完成する大型ビルを拾ってみると、かなり規模の大きいビルが各地域で増えることが分かります。

そうすると、特に最近は大丸有・日本橋・八重洲軸に比べて、赤坂・竹芝軸のビルが、これからのプロジェクト計画も含めて非常に多いことが分かります。築地・臨海は既に増えていて、オリンピックでさらに増えることになると、ビル床は大丈夫なのかという疑問が生じてきます。

かつて六本木ヒルズが完成した2003年において、ビル床過剰説というものがありました。結果的にはその心配は当たらなかったわけですが、これからどうなのかという議論が時々出るようになりました。

実は都市計画で床を増やせば、必ずしも直ちに需給が緩むわけではありませぬので、床の需要を喚起するような政策が行われるかどうかということにかなり懸かってくる部分もあります。そういった意味では、外国人旅行客の増加など、本日この後のパネルディスカッションのメインテーマにつながると思いま

す。

それから、床面積については、特に容積率の緩和等の都市計画の緩和政策を進めるだけでなく、金融取引面での門戸開放がもっと進むのかどうかというのも大きな要素になります。その他、ここに書いてあるようにいろいろな要素があるので、結局は都市計画サイドから言わせると、都市計画は規制緩和を進めていきますし、いい町をつくっていきますし、床は作っていきますから、ぜひ需要喚起の方もよろしく願いますというのが正直なところだと思います。その辺がうまく回転していくと、とてもいい状況が生じてくると思います。